



# 営農NEWS



**本田の置き苗は、葉いもちの発生源となりますので、速やかに適切に処分してください**

**中干しを行って、健全な株づくりに努めましょう**

いもち病は、気温 20～25℃くらいで雨や霧などが続き、イネの葉が長時間ぬれているような条件のときに発生します。このため、6 月ではやや高温多湿、7～8 月では低温多雨の条件のときに、発生が多くなる傾向です。

いもち病の伝染源は、前年に罹病した種子や乾燥ワラ、籾殻などで、これらから育苗中に感染した苗や本田で感染した株に病斑をつくり、発病好適条件のときに胞子を多数形成して、感染拡大を繰り返します。一般的には、本田のなかで最も風通しが悪くて加湿になる置き苗およびその周辺において葉いもちが初めに確認される場合が多く、**置き苗が本田における発生の重要な伝染源になる可能性が高いとされています。**

このため、**補植作業を終えたら速やかに置き苗を処分してください。**なお、処分するときは水田より引き上げて放置するのではなく、**土中に埋めるなど苗が枯れて、いもち病斑を形成しないようにすることが大切で、遅くとも 6 月中旬までには終了**させてください。

梅雨期においても**健全株を育てるために、中干し等の適正な栽培管理**に努めてください。

中干しの開始は田植後 35 日（5 月 10 日植えでは 6 月 15 日）～40 日頃からが目安で、梅雨期と重なるため、排水だけでなく、用水を止めて完全に落水させる工夫が必要です。中干しの程度は、田面に軽くヒビが入り、軽く足跡がつく程度としますが、期間は葉色の濃さ、草丈の伸び具合、水田の水もちなどを考慮して調整してください。目安として、葉色が濃く、水もちの良い水田では 15～20 日間、葉色が薄く、水もちの悪い水田では 10～12 日間と短めにします。

また、中干し後からは根腐れを防ぐため、3～4 日ごとに湛水と落水を繰り返す間断かんがいを出穂後 30 日位まで行い、根に空気と水分を供給して充実した株や粒の育成に努めます。目安としては、田面の足跡に水が残る程度まで自然落水したら、水を補給してやりましょう。

田植時にいもち病防除の育苗箱施薬を行っていない水田では、日陰や風通しの悪い場所を中心に発病状況をよく観察し、発病に好適な天候が予想される場合や初発生を確認したら、適切な防除を実施してください。例年、**葉いもちは 6 月下旬～7 月上旬頃から発生**してきます。発生予想については、**病害虫防除所ホームページに「いもち病予察 (BLAST AM)」データが掲載**されていますので、ご活用ください。

表 1 水稲 いもち病の主な防除薬剤

(平成 29 年 6 月 7 日現在)

薬剤名	使用量(10aあたり)または希釈倍数	使用時期	使用回数
コラトップジャンボP	小包装(パック)10～13個(500～650g) (水田に小包装のまま投げ入れる)	(葉いもち) 初発 20 日前～初発時 (穂いもち) 出穂 30～5 日前まで	合わせて 2 回以内
コラトップ豆つぶ	250g	(葉いもち) 初発 10 日前～初発時 (穂いもち) 出穂 30～5 日前まで	
オリゼメート粒剤	3～4kg	(葉いもち) 初発 10 日前～初発時 (穂いもち) 出穂 3～4 週間前 但し 収穫 14 日前まで	2 回以内
フジワン粒剤	3～5kg(湛水散布)	(葉いもち) 初発 7～10 日前 (穂いもち) 出穂 10～30 日前 但し 収穫 30 日前まで	2 回以内
ルーチン粒剤	1kg(湛水散布)	収穫 30 日前まで	2 回以内
キタジンP粒剤	3～5kg	(葉いもち) 初発 7 日前～初発時 (穂いもち) 出穂 7～20 日前まで	2 回以内
アミスターエイト	1,000～1,500 倍	収穫 14 日前まで	3 回以内
ダブルカットフロアブル	1,000 倍	穂揃期まで	2 回以内
ノンプラスフロアブル	1,000 倍	収穫 7 日前まで	2 回以内
ブラシンフロアブル	1,000 倍	収穫 7 日前まで	2 回以内

注) 粒剤や豆つぶ、ジャンボ剤は、発病前～初発時に処理するため、剤の使用時期を参考に、遅れないようにします。また、無人ヘリや少量散布用の専用ノズルを装着した乗用管理機等による散布については、ラベル等で確認してください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



JA全農いばらき

生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040